

奈良・山田寺跡

- 1 所在地 奈良県桜井市山田
- 2 調査期間 第八次調査 一九九〇年(平二)八月～十二月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 牛川喜幸
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 飛鳥・奈良・平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(吉野山)

山田寺跡では、一九七六年以来七次に及ぶ調査が実施され、伽藍の配置や塔・金堂・講堂・中門・回廊の規模・構造などが明らかとなった。今回の調査は、山田寺の寺域の西限と回廊東北隅部の状況を確認するために、西区と東区の二つの調査区を設けて行なった。調査面積は計八〇〇㎡。

西区では寺域の西限を画する掘立柱南北塀SA六八〇、SA六八〇に開く西門

SB六八五を確認し、また東区では、東回廊SC〇六〇、回廊東南落溝SD五五二、東回廊の東に位置する宝蔵SB六六〇、宝蔵の四周をめぐる雨落溝SD六六一～六六四、寺域の東限を画する掘立柱南北塀SA五〇〇、基壇状高まりSX五三五などを検出した。

木簡は、東区のSB六六〇基壇上面から一点、その西雨落溝SD六六四から七点、計八点が出土した。SB六六〇は方三間の総柱礎石建物で、基壇上面からは木簡のほか若干の木製品・金属製品が出土した。SD六六四は幅一・一五m、深さ〇・二mの素掘りの溝で護岸施設はみられない。堆積土は上下二層に分れ、木簡は上層から大量の木製品・建築部材、少数の金属製品とともに出土した。

8 木簡の积文・内容

宝蔵SB六六〇基壇上面

- (1) ・「日向寺□□二斗一升半□□
同月白□九斤之中八斤者昔日出分

・「
□ $\frac{1}{2}$ □ (321) × 45 × 9 019

- (2) ×経第廿二帙十卷」
(40) × 25 × 2 019

(1)は表裏が判然としないが、かりに「日向寺」で始まる側を表とすると、冒頭の「日向寺」は寺名と考えることができる。日向寺という名称の寺院は、奈良県橿原市南浦町に現存し、浄土宗に属する。

しかし、腐蝕が進んでいるが、裏にも墨痕が認められ、また「日向寺」で始まる面を表とした場合、第二行冒頭の「同月」が受ける文言が現状では初行に見あたらない点が疑問で、あるいは裏とした面を表として文章が「日向寺」に続き、ここは「(何)日、寺に向かう」と読める可能性が全くないわけではない。このように「日向寺」で始まる面が表であるのか、さらには「日向寺」が寺院名を書いたものであるのかは問題の残るところである。

宝蔵西雨落溝SD六六四

弘仁二年十一月十六日充義勝

□□月廿七日□□□□_{〔下カ〕}

×一卷借慈忠 知倉人乙人

目代光敬 〇〇〇〇〇〇
 大同二年十一月廿六日下唯識論疏十四卷 側法師之
 受義勝 知倉人持成

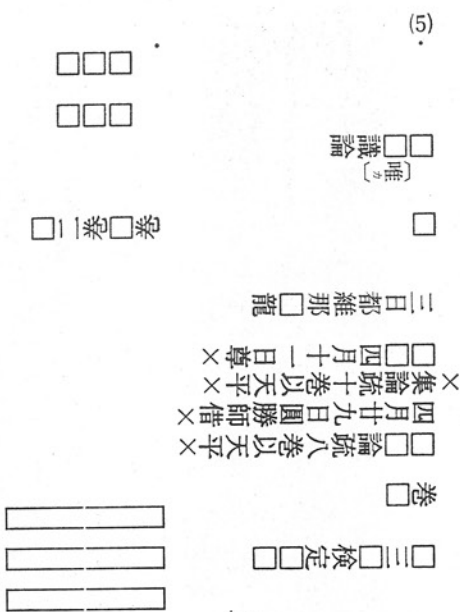
知倉人持成

$\left[\begin{array}{c} \square \\ \square \\ \text{三} \\ \square \\ \square \end{array} \right] \quad \left[\begin{array}{c} \square \\ \square \\ \square \\ \square \end{array} \right]$

$(835) \times (86) \times 4$ 039

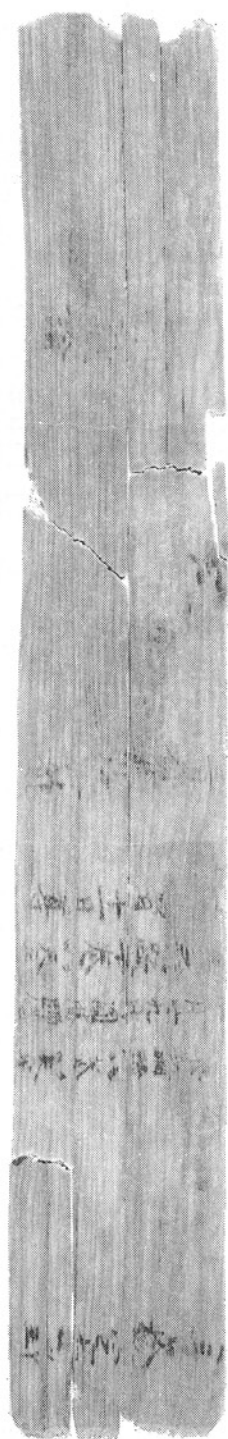
20

$$(107) \times (1215) \times 3 \quad 081$$

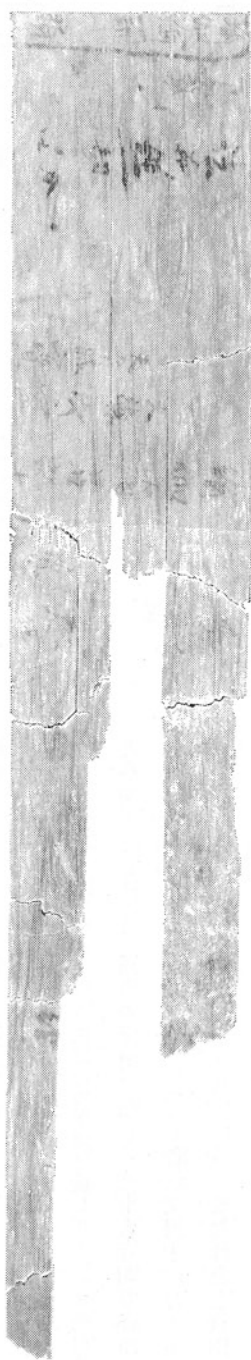


読で、さらに裏にも日付や經典名の一部が書かれていることから
 本木簡は長期にわたって（少なくとも大同二年から弘仁二年までの間）
 表面を削りながら經典の貸出に関する記録を書いたものと考えられ
 る。表には經典の出納にあたった人々として、倉人なる俗人や目代
 。（主録カ）
 ・□□などの僧職が記されており、山田寺の經典の出納をめぐる運
 営のあり方や組織を考える上で重要な記載である。

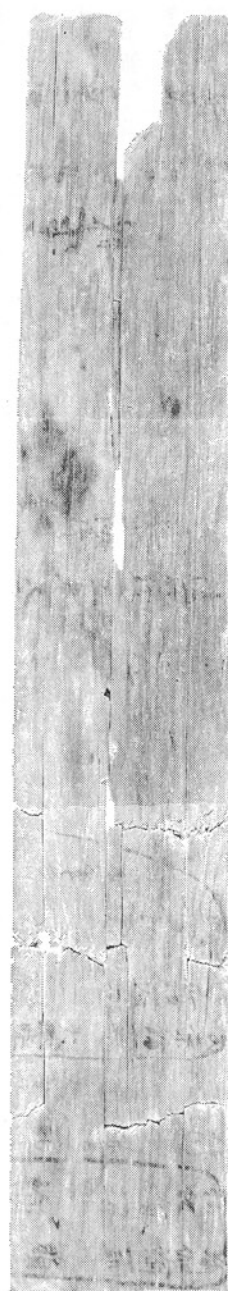
21



(5)表



(4)表



(4)と(5)は所謂横材の木簡(木目に直交して文字を書く)で、いずれも貸出中の経典を検定した結果を記した木簡かと思われる。ともに経典を検定した内容を記したのち、検定の年月日を書き、その下あるいは次行以降に山田寺の上座・寺主・都維那たちが自署を加えている。このことは経典の検定に寺の三綱があつていたことを示す。

(4)の表には検定結果を記した部分とは逆方向に文字を書き、経典の貸出について記録した部分が所々にあり、その中には見せ消ちによる抹消が行なわれている箇所もある。文字を削り取った跡や削り残した文字も見られ、またそこに記された年紀にも天平勝宝六年(七五四)と宝龜七年(七七六)の開きがある。従って本木簡の表は長期にわたって表面を削りつつ使用されつづけたものと推定される。なお(4)(5)によって山田寺三綱の存在とその具体的な僧名が初めて知られた点は留意される。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一〇(一九九一年)

同『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』二一(一九九一年)

山岸常人「山田寺宝蔵と大般若経経帙題籤」『日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)』一九九一年

橋本義則「山田寺跡出土の木簡」『考古学ジャーナル』三三九 一九九一年

(橋本義則)

木簡研究 第二号

巻頭言

狩野 久

一九八八年出土の木簡

概要 平城京跡 平城京左京二条二坊十一・十四坪坪境小路跡 平城京左京二条四坊二坪 東大寺大仏殿廻廊西地区 藤原宮跡 藤原京跡 長岡宮・京跡 長岡京跡 嵯峨院跡(史跡大覚寺御所跡) 大坂城跡 東郷遺跡 吉田南遺跡 小丸遺跡 姫路城跡(武家屋敷跡) 姫路城跡(東部中濠) 玉手遺跡 袴狭遺跡 山の神遺跡 池ヶ谷遺跡 瀬名遺跡 居村B遺跡 今小路西遺跡(福祉センター用地) 中里遺跡 中江田本郷遺跡 高溝遺跡 狐塚遺跡 仙台城二の丸跡 熊野田遺跡 一乗谷朝倉氏遺跡 三小牛ハバ遺跡 能登国分寺跡 発久遺跡 草戸千軒町遺跡 尾道遺跡(GDOI地点) 紺屋町遺跡 下川津遺跡

一九七七年以前出土の木簡(一一)

出雲国庁跡

中国出土簡牘的保護研究

胡 繼高

中国出土木・竹簡の保存科学的研究(抄訳)

訳・佐川正敏

木箱と文書

小池伸彦

所謂『長屋王家木簡』の再検討

大山誠一

有韻尾字による固有名詞の表記

犬飼 隆

彙報

頒価 三八〇〇円 千四〇〇円